

北海道言語研究会 研究例会報告

2019 年度の研究例会は以下の日程とプログラムで開催。参加者諸氏の間で活発な議論が交わされた。

・ 第 18 回研究例会

(2019 年 9 月 26 日 (木) 14:00--17:00; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室)
14:00--14:50

小野真嗣 (室蘭工業大学)

ゲレル・ウルジーナラン (モンゴル工業技術大学附属モンゴル高専技術カレッジ)

「テキスト処理による工学語彙の指標付与の試み」

モンゴル工業技術大学附属モンゴル高専技術カレッジでは、笹川平和財団の支援により日本式工学教育システムの導入で 6 年前に設置された新設校で、今年 6 月に 1 期生を輩出した。この 5 年間における指導上の問題点は、ロシア語、英語、日本語の各工学専門語彙が、製造機械系、土木建設系等の各分野で一部乱立が見られている状態であり、就職先となる社会一般や他大学講義で用いられている用語についても、その統一化・一元化が喫緊の課題である。モンゴル高専同様に新規に設立された高専が他に 2 校あり、全 3 校での用語統一化を進めている。一方、語彙の抽出は進んだものの、その語彙の重要度についての指標がかけており、その意義づけが求められている。本研究では、既存の学習語彙表、名古屋工業大学で編纂された工学系英語語彙表を基に、テキスト処理技術により抽出語彙の指標付与と重要度ソートを試みた。発表ではその一連の作業について発表する。

15:00--15:50

塩谷 亨 (室蘭工業大学)

「ハワイ語における名詞句と動詞句の区別の曖昧性について」

ハワイ語においては、外見上は名詞句と同様である句が意味的或いは統語的に動詞的な特徴を示す場合、また、そもそも、外見上も明確に動詞句か名詞句か判断が難しい場合がある。そのような事例の分析をしながら、名詞句と動詞句の区分について、同系のサモア語及びタヒチ語との対照も含めて考察する。

16:00--16:50

三村竜之 (室蘭工業大学)

「デンマーク語における疑問文の文末音調について」

デンマーク語の疑問文は疑問詞の有無に拘らず主語と述語動詞の順序を入れ替えることで作られるが、*Noget andet?* 「他に何か? (英訳: *Anything more?*)」のよう

に主語や述語動詞を欠く構造的に不完全な疑問文も実際には使用される。これまでに疑問文のイントネーション（文末音調）に関しては上昇調が現れないこと（Grønnum 2005: 343）や平叙文と同様に高く平らな音調や下降調が現れること（発表者 2019）が指摘されてきたが、平叙文との比較検討が十分でなく、また完全な文構造の疑問文のみを考察対象としており、疑問文イントネーションの実態は未だ不明である。そこで本発表では、発表者が臨地調査を通じて採取した一次資料を基に次の3つの問題点を解決し、疑問文イントネーションの実態を解明する：1) 文末音調の点で平叙文との間に差異は存在するか；2) 文構造が不完全な疑問文の文末音調はいかなるものか；3) 本当に疑問文には上昇調は現れないのか。

・ 第 19 回研究例会

（2020 年 3 月 26 日（木）14:00--17:15；会場：室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室）
14:00--14:40

三村竜之（室蘭工業大学）

「アイスランド語アクセント史研究の諸問題」

アイスランド語は主強勢が左端の音節に置かれるストレス（強さ/強弱）アクセントの言語である。アイスランド語の音韻史の研究は豊富だが、その殆どは分節音を対象としており、アクセントの史的変遷に関しては不明な点が数多く残る。例えば、ノルウェー語など同系統の言語が有するピッチ（高さ/高低）アクセントやデンマーク語に見られる声門狭窄をかつては有していたのか否か、有していたとすれば消失した要因は何か、またかつてのアイスランド語は現代語におけるような単純な一型アクセント体系を有していたのか否か、そうでないならば一型アクセント体系が生じるに至った背景は何か、等々。本発表では、これらの問題点を解明する上で必要となる資料やその採取方法、資料の分析と解釈にまつわる課題や問題点を指摘するとともに、解決策の提案も試みる。

14:45--15:25

曲 明（室蘭工業大学）

「日本人大学生の異文化理解の現状 -アンケート調査及び授業レポートの分析に基づいて-」

現在の日本では、政治、経済、文化の面において、国際的な交流が進んで、多様な背景を持つ人々との交流が増加している。このような状況の中で、外国語教育において様々な文化を理解し、多様な考えを持つ人々との共生を目指す異文化理解教育の重要性が指摘されている。本発表ではまず異文化理解とは何かについて社会心理学の理論を用いて考察し、その後筆者が授業中（中国の文化という授業）で行われたアンケート調査及び授業レポートの分析に基づき、日本人大学生

の異文化理解の現状を考察し、今後の課題を考える。

15:40--16:20

落合いずみ（神戸市外国語大学）

「アタヤル語群における「のぼりくだり」の謎解き」

オーストロネシア祖語の「山手・海手」は、*daya と *lahud と再建されているが、これらの祖形がアタヤル語（台湾、アタヤル語群）では、偽装された形式に変わっていることを主張する。アタヤル語においてこれらの語には、語根を偽装するための手段である迷彩的接辞の付加が見られる。

16:25--17:15

塩谷 亨（室蘭工業大学）

「タヒチ語の不定冠詞と未完了相指標について」

タヒチ語と同系の言語であるハワイ語において、不定冠詞由来の後接語 *he* が名詞句でも動詞句で用いられ、結果として、外見上、名詞句か動詞句か曖昧になるという事例があった。タヒチ語においてもそれと対応する類似した事例が存在する。タヒチ語においても名詞に付加される不定冠詞的な後接語と動詞に付加される未完了相を表す後接語がいずれも *e* という同一の形式で表される。また、ハワイ語と同様にタヒチ語でも名詞と動詞を区別できるような形態的な目印がない。結果として、外見上全く同じ構造に見える句がある場合には名詞句、ある場合には動詞句として用いられる。これらの事例を比較して、タヒチ語においてもハワイ語で見られたような曖昧さが存在するのかどうか考察した。

『北海道言語文化研究』 投稿規程

1. 『北海道言語文化研究』への投稿は、資格を問わない。
2. 投稿内容は、未発表であり、かつ投稿時に、他の学会等への発表の応募または投稿を行っていないものに限る。
3. 原稿の応募は『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイル、もしくは印刷したもの (1部)を提出する。
宛先:92hashimot@gmail.com
5. 原稿の書式は、スタイルシートに準拠させる。
<http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/index.html> を参照。
5. 本研究会による電子化による公開を、著者が本研究会誌に投稿した時点で許諾したものとする。<http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/journal.html>
6. 締切は各年度の 11 月 30 日とする。
7. 投稿された論文については、2名の匿名査読者によって査読を行う。
8. 掲載の可否は編集委員会が決定する。
9. 著者による校正は原則として初校のみとする。訂正は誤植に限るものとし、内容の変更は認めない。
10. 印刷費は著者が実費を負担する (印刷費用によって変動あり)。
11. 稿料は払わない。

(2010年3月)

スタイルシート

- (1)使用言語:日本語もしくは英語。
- (2)原稿:『WORD』で読める形式のファイル (DOC ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイル、もしくは印刷したもの (1部)を提出する。送付時に、WORD のバージョンを編集委員に知らせる。スタイルシートのテンプレートおよびPDF化用のフリーソフトに関しては、本研究会の WEB ページを参照。(URL: <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/>)
- (3)余白(マージン):上端 30mm 下端 25mm 左端 25mm 右端 25mm。
- (4)行数:37 行。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (5)字数:全角 39 文字または半角 78 文字。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (6)フォント:和文は MS 明朝、MS P 明朝、英文は Times New Roman のみを認める。特殊文字を使用する際には、unicode を用いることとし、その旨について投稿時に編集委員まで申し出る。
- (7)ポイント数および書体 :
- | | | |
|--------|-----------|------------------|
| 題名: | 18 ポイント | 太字 中央寄せ |
| 氏名: | 14 ポイント | 太字 中央寄せ |
| 要旨: | 9 ポイント | 「要旨」という文字のみ太字 |
| キーワード: | 10.5 ポイント | 「キーワード」という文字のみ太字 |
| 本文: | 10.5 ポイント | |
| セクション: | 10.5 ポイント | セクション番号と題は太字 |
| 謝辞: | 9 ポイント | 「謝辞」という文字のみ太字 |
| 注: | 9 ポイント | 「注」という文字のみ太字 |
| 参考文献: | 9 ポイント | 「参考文献」という文字のみ太字 |
- (8)タイトルおよび氏名:和文と欧文の2種類で書く。本文と同じ言語を先にする。和文の姓と名の間には全角の空白を 1 つ入れる。欧文の氏名は姓をすべて大文字にする (例:John BINTLET)。和文と欧文それぞれの間に 1 行の空白を入れる。
- (9)ページ数:原則として図表を含め、20 ページ以内とする。
- (10)要旨:日本語でも英語でも可。場所はタイトルの下に 1 行空白を入れた後。分量は日本語の場合 400 字以内、英語の場合は 200 語以内。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)、両端揃えにする。
- (11)キーワード:5 つ程度のキーワードを要旨の下に 1 行あけて書く。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)。
- (12)セクション (節):セクションの番号は 1 から始める。セクションおよびサブセクションの番号の形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。
- (13)段落:両端揃えにすること。段落の最初の文字の下げ方等の形式は問わないが一貫した書き

方になっていること。

(14)注:通し番号をつけて脚注もしくは後注とする。通し番号の形式に指定はないが、一貫していることと、番号が行頭に来ないようにすること。ただし過去における研究発表情報等はタイトルの後ろに*(半角アスタリスク)を付加し、注の先頭で言及する。

(15)参考文献:文献は本文の後ろ、後注がある場合には注の後ろに付加する。形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。

(16)執筆者紹介:①氏名、②所属機関・部署、③メールアドレス、④URI、⑤電話番号等を論文末に付加する。①は必須。②以降は任意で、その他の事項も付け加えることができる。現在の所属機関がない場合には、元～でも可。

(2014年2月6日改定)

Afterward

This year's publication of the journal marks a time of new beginnings and newfound optimism in Japan as the country welcomes a new decade, the nascent Reiwa Era, and the long-awaited 2020 Tokyo Summer Olympics.

Accompanying the excitement of the upcoming Olympics is the prospect of seeing the introduction of “new” sports such as karate, skateboarding, sport climbing, and surfing to the games. While these last three “extreme” sports share a contemporary or modern image, surfing, particularly in Japan, has a long and fascinating history that should be reflected upon as the nation prepares to welcome the world to its beaches.

Although Polynesia, particularly Hawaii, is widely regarded as the spiritual and technical origin of modern surfing, indigenous surf cultures have independently emerged in a number of seafaring nations around the globe. In Chile, for example, the riding of waves on *caballitos de totora* (little reed horses) predates Hawaiian surfing by centuries. In Sao Tome, off the northwestern coast of Gabon, a *corre-barra* (surfing) culture independently sprouted up around the riding of hand-hewn *tabuas* (boards). A similar situation has been observed in New Guinea with the traditional custom of *pelang* surf riding.

Unbeknownst to many in Japan it is also a nation with its own indigenous surf culture. This traditional wave-riding was carried out on *itago* (boat floor planks), and the pastime was called *itagonori* (boat floor plank riding). According to surf historian Ohkawa (2018), the earliest written record of *itagonori* came from the musings of a haiku poet who wrote about a group of children partaking in wave riding in 1821 on the Yamagata seashore. Due to their size and shape, *itago* were perfect for prone surfing. The superfluous nature of small fishing boats pulled up on local Japanese beaches also meant children had easy access to these wave riding tools and the pastime quickly spread. With the opening of Japan's first public bathing beach at the Terugasaki Coast in Oiso in 1885, purpose built wave-riding *itago* became one of the original rental items on offer at the local beachside *chaya*, the forerunners of today's *uminoie*. The golden age of *itagonori* on the Shonan coast lasted until the 1960s when it was supplanted by modern surfboards and surfing.

While enjoying the surfing competition at the 2020 Tokyo Olympics please take the opportunity to reflect on Japan's unique surfing culture and heritage. You may also like to head down the coast from the Shitashita Olympic surfing venue to Kanagawa, where you can see original *itago* on display at the Oiso Municipal Museum.

(MJ)

北海道言語研究会 URL: <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/index.html>

本研究会は談論風発のくだけた雰囲気が集まりで、言語に関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。皆様のご参加、ご発表、ご投稿を心よりお待ちしております。

『北海道言語文化研究』への投稿について

本誌に研究論文の投稿をご希望の方は、スタイルシートに則った原稿を下記宛に emailでお送りください。締め切りは11月30日です。原稿受領後、編集委員が査読を行い、掲載の可否を決定します。発行後、本誌を数部(印刷費用によって変動します)進呈いたします。スタイルシートに則ったファイルをご希望の方は、本研究会WEBページからダウンロードできます。ご活用下さい。

研究発表について

本研究会では随時研究会を開催しています。研究発表をご希望の方は、下記宛に発表の題目と要旨をemailでお送りください。持ち時間は発表40分質疑20分です。発表者は抄録を『北海道言語文化研究』に掲載することができます。開催日時に関しては、受付後、後日メーリングリストや本研究会WEBページでお知らせする予定です。

北海道言語文化研究 第18号

2020年3月31日発行

発行者:北海道言語研究会

連絡先:92hashimot@gmail.com

〒050-8585

北海道室蘭市水元町27-1

ひと文化系領域

北海道言語研究会事務局

北海道言語文化研究

第 18 号

2020 年

論文

- | | | |
|--|--------|-----|
| セデック語パラソ方言の数詞と関連表現について | 落合 いずみ | 1 |
| 北海道アイヌ語方言の分類再考—グラフ理論による方言研究の新展開：人文学データの分析を代数構造から見直す— | 小野 洋平 | 19 |
| 現代ドイツの囲碁事情(2) | 杉浦 康則 | 47 |
| アイスランド語における「呼びかけ」のプロソディーに関する覚書 | 三村 竜之 | 73 |
| ハワイ語における名詞句と動詞句の区分に関わる曖昧性について | 塩谷 亨 | 91 |
| モンゴル語の受動構文と使役構文の<受身>の意味 | 橋本 邦彦 | 111 |
| ロシア語の čaj「茶」の末尾要素 j について | 柳沢 民雄 | 155 |

研究報告

- | | | |
|---|----------------------------|-----|
| Phatic Language for Building Relationships | ジャック プロドウスキー | 177 |
| いかにも大阪弁のアクセント資料 | 福盛 貴弘 | 183 |
| モンゴル客員研究員招聘による共同研究に関する報告
小野 真嗣、ゲレル ウルジーナラン、ジャガダグスレン ウランツォージ、
フレルトゴー ムンフエルデネ | | 197 |
| 室蘭工業大学言語科学・国際交流ユニット「室蘭工業大学の語学教育におけるより良い動機づけのための多面的研究」研究成果報告-第3回- | 塩谷 亨、島田 武、ブライアン ゲイナー、山路奈保子 | 201 |

北海道言語研究会

Journal of Language and Culture of Hokkaido

No. 18

2020

Articles

- Numerals in Paran Seediq and Related Expressions Izumi OCHIAI 1
- Observations on Lexicostatistical Classifications on Hokkaido Ainu Dialects—A New
Development on Dialectology, Graph-theoretic Approach from Algebraic Structure— 19
Yohei ONO
- The Current Situation of Go in Germany (2) Yasunori SUGIURA 47
- Notes on the Prosody of the Vocative in Icelandic Tatsuyuki MIMURA 73
- Ambiguity concerning the Distinction between Noun Phrases and Verb Phrases in Hawaiian 91
Toru SHIONOYA
- The Meanings of <Passive> Shared by the Passive Voice and the Causative Voice in 111
Mongolian Kunihiro HASHIMOTO
- The Final Element *j* of a Russian Word *Čaj* ‘tea’ Tamio YANAGISAWA 155

Research Report

- Phatic Language for Building Relationships Jack BRODOWSKI 177
- The List of Accent in Idiomatic Osaka Dialect Takahiro FUKUMORI 183
- A Report on Language and Culture Studies with Visiting Researchers from Mongolia 197
Masatsugu ONO, Ulziinaran GEREL, Urantsooj JAGDAGSUREN
and Khureltogoo MUNKH-ERDENE
- “Research Project Report: Studies on Better Motivation in Foreign Language Learning 201
from Various Angles -Part3-” by Linguistic Science and International Relations Research
Unit, Muroran Institute of Technology
Toru SHIONOYA, Takeshi SHIMADA, Brian GAYNOR and Naoko YAMAJI

The Hokkaido Linguistic Circle